

ドS部長に社長の私が
xxxで可愛がられるお話。

【登場人物】

- ・ 君澤 光

文房具メーカー社長。二十代。

ある日具合を悪くした父親から会社を任されることに。

部長の冬吾と付き合っているのは秘密にしている。

普段は社長としてしっかりものを装っているが、

冬吾の前ではM気質。

- ・ 篠原冬吾

部長。どがつくヤキモチ焼き。

普段はクールな性格でデキる男を演出しているが

非常に独占欲が強い。

光を溺愛しているものの、会社ではクールに振る舞っている。

私と部長の冬吾さんが付き合っていることは、秘密中の秘密だった。

というのも、私は突如体の具合を悪くした父から会社の社長を任されることになって、まだ数年目。それなのに冬吾さんとお付き合いを明るみにするわけにはいかなかった。

冬吾さんとの付き合いはつい最近の話。以前から知っていたけれど、その時はこんな関係になるなんて思いもしなかった。

冬吾さんは父が信頼する人間だった。だから私も頼るようになって、気がついたらいつの間にか好きになってしまっていた。

篠原冬吾。三十七歳。クールで、物おじせず、年上相手でも平気で意見する。営業させればとつて来れない仕事はないと言われた我が社きつての有能社員。社員のほとんどが彼を尊敬している。この年で結婚してないこともあり、女性社員からは桃色の視線で見つめられることもしばしば。ただ、それは表の顔。

「冬吾さん……あ、の……もう、いいでしょう……？」

オフィスの最上階は私の執務室。普段はともかく、退勤後の時間は誰も入って来ない。薄暗く広いオフィスに、私は立つたままスカートを持ち上げていた。ストッキングにガーターベルト、下着が丸見えだ。普段仕事をしている場所でこんなことをさせられるなんて。

その前にはまるで品定めするように佇む冬吾さんがいる。もう十分以上、こんなことをさせられている。いい加減恥ずかしさで足が震えてきた。内股になった足の間から、じわりと何かが滲む。

「お願い……恥ずかしいから……」

ことの発端は些細なことだ。ちよつとばかり冬吾さんが機嫌を損ねるようなことがあって、私はこんなことをさせられている。冬吾さんがこういうことをするのは、実は初めてじゃない。でも、仕事場でこんなふうにされたのは初めてだったから、私も戸惑っていた。

「その割に、素直に従うんだな」

「だ、だって……」

普段、私は上司として彼に接している。いくら年下でも、私は会社を任されている立場。そして彼も、そんな私に従う部下として接していた。けれどこういう時、私たちの立場はまるで逆転してしまう。

こういう時、私は冬吾さんに逆らえない。言われるまま命令されるまま、行動してしまう。これじゃまるで冬吾さんが社長状態だ。

「机に座って、自分で見せてみる」

「え……」

「出来るだろ」

「そんな……の、こんなところで……恥ずかしいじゃない」

けれど冬吾さんは冷たい目で私を見つめるだけだ。私が行動に移すまで許さない。そう言っている。

私は戸惑いながらも、普段仕事をしている執務室のデスクに座り、冬吾さんに向かって脚を広げた。踵を机の角に掛けて、M字開脚になるように見せつける。

——— こんなの……アソコが見えちゃうのに……っ。

「それじゃ肝心な場所が見えてないだろ」

「えっ……」

「自分で開いて見せろって言っただろ」

冬吾さんの言葉の意味は分かっていたけれど、職場でこんな破廉恥な真似をするなんて。もし誰か来たら———。

「早くやらないと、もつと恥ずかしいことさせるぞ」

困った私は、どうしようもなくなつて下着に手を掛けた。股の部分を指で引っ掛けて、大切な場所が見えるようにそつと避ける。こんなところみられちゃうなんて……。

「お、お願い……許してえ……こんなの嫌あ……っ」

「のわりに、ヒクついてるぞ」

指摘の通り、私のアソコは誰にも触れられてないのに。パクパク口を開けていた。見られて恥ずかしいのに、勝手に動いてしまう。

「随分エロくなったもんだ。会社でまんこ丸出しにして、見られて興奮してるのか」

「違……っそんなんじや……」

私が否定すると、冬吾さんはツカツカと歩み寄った。そのままデスクの上に置かれた万年筆を手にとると、先っぽをべろりと舌で舐めて私のアソコに近づけた。

「やだっ、そんなの入れ——んああっ♡♡」

万年筆は私のおまんこの中に簡単に入った。まだ何もしていないおまんこはすっかり濡れていて、ゆっくりと挿入される万年筆を飲み込んでいく。

「やだあ……入れないで……おねが、やあ……っ♡♡」

「なんでこんなに濡れてるんだ。見ろ、全部入ったぞ」

万年筆の先まですっかり中に収まってしまふ。私の中に収まったそれを、冬吾さんは指で更に押し込もうとした。

「だ、だめえ……っ♥も、入らないっ♥♥抜けなくなっちゃうからあ♥♥」

「だったら自分で出してみろ。じゃないともつと奥に入るぞ」

「ひいいッ♥♥」

にゅぷっ♥ぬぷっ♥♥ぬぷぷっ♥

冬吾さんはぐいぐいと万年筆を指で押す。万年筆の先っぽが、私のおまんこの奥に当たる。

「いやあああ♥♥入っちゃう♥♥子宮に入っちゃうの♥♥やめてえ♥♥そんなの入れないでえっ♥♥」

「こんなもの突っ込まれて喘ぐなよ」

「ひああっ♥♥」

冬吾さんは指を離して、万年筆を押さえつけるように上から私の下着を被せてしまった。力が加わらなくなつて抜けようと押し出された万年筆が、また下着に押されて奥へ入ろうとする。

「いやああああ♥♥♥抜けないっ♥やだあっ♥♥んああっ♥奥、ああっ♥だめえ♥」
ぬるるっ♥♥ぬるるっ♥♥ぐにぐにぐにっ♥♥♥

「なんだ、そんなに気持ちいいのか？ パンツにシミがでてるぞ」

「あっ！♥♥あっ、あ、ああ♥♥だめっ♥♥そこっ♥♥おまんこいじめないでえ♥♥気持
ちよくなっちゃうの♥♥万年筆でイっちゃう♥♥」

「イきそうか？ ならイけぱいい。ほら、お前の好きな万年筆だぞ」

ぐいつぐいつと下着の上から指で万年筆を押される。奥へ押し込まれた万年筆が内壁
を押し上げて、気持ちいい感覚に中から何かが込み上げてくる。

「あっ？！♥♥あっ♥♥あっ、あっ♥♥ああっ！♥♥やつ♥♥だめっ♥♥だめっ♥♥♥
だめえっ♥♥♥おまんこきもちいい♥♥万年筆でイかされちゃう♥♥お仕事する場所な
のにいい♥♥」

ぬりゅんっ♥♥♥ぬりゅんっ♥♥♥ぐに、ゆっ♥♥♥ぐに、ゆっ♥♥♥
「んやあああッ♥♥あ、つひう、つく……♥♥んんうう~~~~っ♥♥」

デスクの上でビクンビクン跳ねながら私はいった。くたりとデスクの上に仰向けになり、開いたままの足の隙間にはまだ万年筆が押さえつけられて居座っている。

「社長室でまんこに万年筆突っ込まれていったのか、相当な淫乱だな」

くつと笑いを漏らしながら、冬吾さんは満足そうに笑みを浮かべた。力が抜けた私に近づく、そのままぐったりした足を開いてまんぐり返しにしてみよう。さきほどまで万年筆を押さえつけていた下着を取り去ると、おまんこから少しずつ万年筆が押し出される。

「あつ……♡♡♡出ちゃう♡♡♡ん……♡♡♡」

「まだダメだ」

「ひいいいっ♡♡♡」

出そうになった万年筆を再びぐい、と奥に指で押し込まれる。せつかく快感から解放されそうになったのにまだ逆戻りだ。

「まだ許すとは言っていないだろ」

「そんなあ♥♥お願い……冬吾さ……許してえ……♥♥」

「嫌だね」

冬吾さんはどこか楽しんでいるみたいに見えた。

「今日営業に来た男——杉浦だっけか？　なんだ、ああ言うのがタイプなのか」

冬吾さんはデスクの上のペン立てから一本ペンを取った。それをそのまま私のおまんに近付けて、万年筆が入っている横からぐいと奥に滑り込ませる。

「んひいいッ！♥♥」

「お前のことやらしそうな目で見たもんなア？　アイツ今頃きつと、お前をズリネタにしてくるぞ」

「だめえええ♥♥♥そんな、いっぱい入れないでえ♥♥ああんっ♥♥」

「じゃあなんでこんなに啞え込んでるんだよ。まだ入るだろ」

冬吾さんはまたペンを取り出して、私のおまんに近付ける。おまんこを広げながら、もう一本ペンをそこに押し込んだ。

「ああああ……♡♡いやああ……♡♡こんな、やだ……っ♡♡」

「社長が会社のデスクの上でまんこにペンを三本も突っ込まれて喘いでるなんて知ったら、杉浦はどう思うだろうな」

「んっ♡♡あ、だめ♡奥、ぐりぐりされてる♡♡先っぽがおまんこ刺激して……っ♡♡」

「こら、勝手に感じるな」

「はうっ♡♡」

開脚させられた脚の間で主張している秘豆を指で弾く。私の体は分かりやすくびくん！と動いた。

「今のお前の写真、杉浦に送ってやろうか？　アイツ、きつと顔真っ赤になるぞ」

「いやああ……♡♡冬吾さん……お願い……っ！　これ、抜いてえ……♡♡おまんこの中、あっ♡♡変になっちゃう……っ♡♡」

「そんな顔して説得力ないんだよ。お仕置き追加だ」